遥かなる豆満江よ！

神奈川県　中島　礼子

昭和二十（一九四五）年八月九日、私は腹痛で防災訓練を休んで家にいた。窓辺に座って昼近くになっても帰って来ない母を待っていたそのとき、突然北の方から飛行機がやってきた。私は外に駆け出して手を振った。それは、久しぶりに日本の飛行機が飛んできたと思ったからだった。そこへ母が慌てて帰宅して、「早く家の中に入りなさい。今のは日本の飛行機ではありませんよ」と言っているところへ、今度は会社から父が慌てふためいて帰宅した。父は「今の飛行機はどうもソ連軍のものらしい。国境を越えて侵入してくるかもしれないから、避難命令がきたら、すぐに出発できるように」と、それだけを言って再び急いで会社に戻って行った。母は、家にあった米や大豆を炒ると、袋に詰めた。私も救急品袋やリックサックに着替えを入れたりして手伝っていたところに、二人の姉も帰宅して来て家族全員で準備をした。そこに伝達の人が来て、「四、五日山の中で様子をみることになったので班ごとに行動することになる」と言ってあたふたと出ていった。出発は明日の未明とのこと。家族全員で準備をした。その夜は庭の防空壕で夜明けを待った。翌日の未明に必要な荷物を持って家を出た。そして、その日が我が家での最後の日になろうとは、夢にも思わないことだった。

父羊四十四歳、母セッ四十三歳、長女妙子十八歳、次女ルリ子十五歳、三女の私、礼子十一歳、四女普恵九歳、長男良宣五歳、五女正子二歳、総勢八人の大家族であった。父はしばらく残って様子を見るということになり、母と子供六人で、夜明けと共に班の人たちと、阿吾地の社宅を出発した。子供連れで幼い子もいる我が家は、どうしても班の人より遅れてしまう。空は白み始めて朝靄

が立ちこめていた。しばらく歩いているうちに少し広い川原に着いたので、そこで全員休憩となった。川の水で米を研ぎ、飯盒でご飯を炊いて朝食となった。班の人や級友もいて、そのときはみんなで遠足にでも来たような気分になって楽しかったが、それから始まる苦難の道を知る由もなかった。朝食を食べているところに父が私たちに追いつき、母はほっとした様子であった。近くにいた大人たちが、四、五人集まって、もう家には戻れないだろうと言っているのを聞いていたが、私は一瞬心配になったけれども、決してそんなはずはない、荷物だって全部置いてきたのだから、きっと家に帰れると、そう自分に言いきかせていた。

父は、熊本県の水俣という小さな町で生まれた。そこは風光明媚な町であり、七人兄弟の四男として育った。十八歳のころ勉学を志して上京し、働きながら夜学に通い就職して、新潟生まれの母と知り合い、二十五歳で結婚した。職場では、元社会党の委員長をしていた、浅沼稲次郎氏と知り合いになったとのことだった。長女が生まれ、やっと生活も安定しこれからというとき、新天地を求めて北朝鮮へ渡ったとのことであった。そのころ、大勢の日本人が中国や朝鮮、そして台湾へと希望に燃えて海を渡って行ったとのことで、若かった私の両親も、さらなる夢を抱いて、北朝鮮へと渡って行ったのだと思う。

昭和五年の夏、渡鮮のときには母は二番目の姉を身ごもっていた。北朝鮮の永安という町で生活をすることになり、そこで二番目の姉、そして私と妹の三人が生まれた。日本人専用の社宅に住まうまでは、朝鮮人家屋を借りて住まい、冬は川の氷を割っておしめを洗ったり、大変な苦労をしたそうだ。その後さらに国境に近い北の地、阿吾地という所へ越して、そこで弟と妹が生まれた。三方をなだらかな山で囲まれ、近くには豆満江が悠々と流れていて、そこでは春には林で郭公（カッコウ）が鳴き、西洋ツツジやレンギョウの花が咲き、秋になれば、女郎花（オミナエシ）や桔梗（キキョウ）が咲き乱れ、優しい自然が

いっぱいにあふれていた。街は日本人が建てた立派な工場や、赤煉瓦作りの社宅や学校が整然と並んでいた。社宅の中は各部屋に暖かなスチームがあり、台所にはお湯も出るようになっていて、厳しい冬の寒さの中でも快適に暮らすことができた。長い冬には、校庭や広場にスケート場ができて、大人も子供も楽しんだ。思い出の中で、あのころが我が家にとっては、最も幸福な時代であった。だが、あの幸福な日々を手にするまでには、両親がどれほどの苦労をして日夜大変であったか、折にふれ母が語ってくれた。どんなときでも、半世紀過ぎてもなお、心の中にしっかりと残された、優しく温かな思い出のすべてを忘れることはできない。戦争は、それらの豊かな日々を一度に奪い去ってしまったのだ。

　避難を始めてしばらくは、家族全員揃っていて、共に出発した人たちとも付かず離れずで、野宿をしてもあまりつらいとも思わなかったが、日が経つにつれて食糧も乏しくなり、一日中山野を歩き続けるので足が棒のようになり、疲れてきた。日が暮れると、なぜこんな所を歩いているのだろう、早く我が家に帰ってゆっくりお風呂にでも入りたいと、何度思ったことだろう。

　その日も、歩き続けて昼近くになって、きれいな小川のほとりで休憩となった。川の水で埃まみれの顔や身体を洗い、子供たちは水遊びを楽しんでいた。毎日背負われていて窮屈だったのだろう、一番末の妹は水に浸って大喜びで笑っていた。あの笑顔は忘れることはない。そのときに日本軍のトラックが、何台か橋の上を通り過ぎていった。軍服の兵士が大勢トラックの上で私たちに手を振っていたが、その中の何人かが「おーい戦争は終わったぞ。日本は負けたぞ」と叫んでいた。父はトラックをにらむようにして言った。

「戦争はまだ終わっていない。負けてはいない」と言ったが、なぜかその声は小さかった。本当に戦争が終わったというなら、私たちは何も知らずに山野を歩き続けていたことになるのだと思い、

私はとても複雑な気持ちで、流れゆく川の水を見つめながら、もう我が家に戻れないかもしれないと一人でつぶやいていた。涙があふれてきて、人に見られると恥ずかしいと思い、川の水で急いで顔を洗った。

日が経つにつれ皆気力も失せ、痩せて小さくなった二歳の妹さえも、おんぶして歩くのがつらかった。あの日も朝から歩き続けていて日暮れ近くになっていた。私は弟と妹の手を引っ張って、両親や姉たちより少し先を歩いていた。近くを歩いていた人たちも、皆疲労困憊で、誰もしゃべることなく無言で歩いていた。そのとき、あとからトラックが大勢の人を乗せて走り去っていった。トラックに乗っている人たちが羨ましかった。

とそのとき、また一台のトラックが後から走ってきて、私たち行列の横で止まった。周りの人もみんな駆け寄って来た。台車の上から手を出してくれる人がいて、次々とトラックに乗せてくれた。私も慌てて手を出すと、知らない人が引き上げてくれた。弟も妹もトラックに乗っていた。これでもう歩かなくて済むと、そう思ったときには車が走り出していた。後の方で「車から早く降りなさい！」と叫んでいる母の声が聞こえた。走り出したトラックは止まってくれなかった。ぽつりぽつりと降り出していた雨も、日暮れのころにはざあざあ音を立てて降ってきた。びしょ濡れになりながら、私は大変なことになったと気が付いた。ひたすら走り続けるトラックの上で、私の不安は募るばかりであった。何時間走ったのか覚えていないが、びしょ濡れで、震えている弟や妹を見て、悪いことをしてしまったと泣きたい気持ちだった。

やっとトラックが止まって降ろされた所は、大きな寺の本堂の前で、お互いに家族や班ごとに確認し合っていたが、私たち姉妹弟三人は誰一人知った人もいず、また大人の人たちは焦立っていて、他人の子供のことなど誰も気にかけてくれず、「お母さん！」と叫びたい気持ちだった。妹

たちのためにもしっかりしなくてはと気を取り直して、二人のびしょ濡れの服を脱がせて、力いっぱい絞ったけれど、疲労と空腹でなんの役にも立たなかった。私たち三人は、広い部屋の片隅で濡れたままの服をまた着ると、床の上に横になった。お腹が空いたと泣いていた弟も、疲れて眠ってしまった。私は不安が募りなかなか眠れなかった。近くのおじさんに、ここはどこなのかと聞いてみた。おじさんは、「ここは会寧の駅の近くで、明朝汽車が出るので、ここに泊まっている人は満州へ渡るのだよ」と教えてくれた。私は、父は一度も満州に行く話はしていなかったから、この人たちと一緒に行動したらだめだと考えて、朝になったら弟と妹を連れてトラックの走ってきた道を戻ろう、そうすれば家族にきっと会えると、自分にしっかり言い聞かせて眠った。

どのくらい時間が過ぎたのか、夢の中で人を呼んでいる声を聞いた。遠くの方から何度も呼んでいる微かな声。夢だったと思って目が覚めた。皆疲れているのだろう、重なり合うように眠っている。もう少しで夜が明けるだろう、そう思って再び目を閉じた。そのとき、はっきりと、「礼子！礼子！」と私を呼んでいる声を聞いた。誰一人起きる気配もない。私は跳び起きると、声のする方へ走った。障子を開けると、なんと、そこに父と姉が立っていた。暗闇の中で父だとはっきり分かった。思わず「お父さん！」と叫ぶと、父が私の手をしっかり握りしめてくれた。父が「良宣は？　普恵は？」と尋ねたので、「いっしょにいる」と答えると、「ほんとうによかった」と言って妹たちが寝ている所まで来てくれた。雨が降りしきる中、灯り一つない夜道を、姉と二人で夜通し歩いて探し続けてくれた父。一日中家族全部の荷物を背負い、どんなに疲れていたことか。子供を思う一念が、父の足を私たちの方へ導いてくれたのだとしか思えない。翌朝、雨は止んでいた。私たちがトラックに乗って走った分だけ往復したことになり、私たち一家は集団から取り残されて

しまった。待っていてくれた母や姉の所へ戻ったときは、ほんとうに嬉しかった。

もし私たち三人が見付からなかったら、ここに残って子供たちを探し出すんだ、と父が言っていたとあとになって母が教えてくれた。それから数日後、川の水を飲んだりしたのが原因で下痢をしていた、末の妹が死んだ。その日、一日中歩き続けて、たどり着いた小さな村で夜になったので、防空壕のような穴の中で私と妹と弟の三人は寝ることになり、空腹のまま湿った土の上に横になったが、なぜかなかなか眠れなかった。翌日の明け方近くに、姉が私たちの所へ来て、「正子ちゃんが死んだよ」と知らせにきた。私は跳び起きて母の所へ走った。小さな妹は母の手にしっかり抱かれて、眠っているようだった。私たちは妹の死を実感できなくて、みんな一言もしゃべらず母に付いて歩いた。歩きながら、正子のお墓をみんなで作ろう、と父が言った。「ごめんね、ごめんね」と私は、おんぶするのが重くていやだ、などと言ったことを心の中で詫びていた。妹は、「お母さん、これから私がずっと正子ちゃんをおんぶして行くから、正子ちゃんをお墓に残していかないで」と言って泣いていた。昼近くきれいな小川が流れている場所を見付けると、ここにお墓を作ろうと父が言った。近くの家からスコップを借りて来て、小さな穴を掘った。私たちは道端や野原に咲いている名も知らぬ花をたくさん摘んだ。私たちの様子をじっと見ていたオモニが紙包みをくれたが、その中には数個のお菓子が入っていた。穴の中に草をたくさん敷きつめ、その上に小さな妹の亡骸を寝かせて、周りにみんなで摘んだ花を入れた。手前にオモニからもらったお菓子包みをそっと置いてやった。「さあみんなでさよならをするんだ」と父が言ったとき、それまでずっと我慢していた哀しみが一度に噴き出して、私たちは声をあげて泣いた。「さあ、みんな泣かないで。正子ちゃんは、私たちの足手まといにならないように、先に天国へ行ったのよ。みんなが元気を出

して頑張って欲しいと思っているのよ」と、そう言う母の目も泣いていた。長いこと手を合わせていた父が、顔をあげて言った。「そのうちに、きっと戦争のない平和な日がくる。そのときに、みんなでまたここに来よう。きっと来るんだよ」と涙声で私たちに言った。私はそのとき、この場所を決して忘れることがないように、周りの景色を見渡した。三方をなだらかな山に囲まれ、お墓を作った裏手には林があり、向かい側の道の向こうに古い民家が四、五軒並んでいた。子供たちが何よりの宝だと、いつも愛情いっぱいで育ててくれた両親にとって、幼い我が子の死がどんなにつらく悲しいことであったことかと、今になってもそのときの情景が瞼にまざまざと焼きついている。

その日は、朝から雲一つなく晴れて穏やかな日であった。両側に古い民家が建ち並んでいる町の中を、南へ向かって歩いていた。突然頭上で爆音がして、ダダン、ダダンと弾丸が飛んできた。「機銃掃射だ、早く建物の陰にかくれるんだ」父が大声で叫んだ。私は弟の手を引っ張って、近くにあった建物の壁にへばり付いた。雨のように弾丸が降り注ぐ、路上の石が弾け飛んだ。飛行機が去ったあと、全員無事でほっとした。先を急がなければ、橋が爆破されてしまう。そう聞かされて、皆頑張って歩いた。長い坂道の途中で、また、ソ連機が飛んできた。みんなは茂みの中に慌てて隠れた。そのとき、毛布代わりにしていた大切なオーバーを盗まれて、母は途方にくれた。坂道を登りきると、尾根づたいに長い道があり、疲れた体で空腹のまま歩き続けた。どこまで行っても果てしない道に思われた。朝は雲一つないお天気だったのに、夕方近くになってぽつぽつ雨が降ってきた。空腹と疲労の身には、雨に降られてびしょ濡れになることが何よりもつらいことであった。雨が激しくなると、辺り一面墨でも流したように暗くなり、どこに道があるのか分からなくなってしまった。前を歩いていた父が突然「こ

こから下るぞ」と言った。子供たちから先に下り始めたものの、激しく降る雨水は上の方から川のように流れ、足が滑ってまともに歩けない。私は尻もちをついたまま、流れ落ちてくる雨水に押されて滑り落ちていた。夢中で近くの木にしがみつき、私は辺りをうかがった。

そのとき、一人きりになってしまったことに気が付いた。誰か下りて来るかとしばらく待ったが、誰も来ない。こんな深い山の中で、一人ぼっちになってしまうのかと思うと悲しかった。私はあらん限りの声を張りあげて、「お父さん！　お母さん！」と叫んでみたが、木々の葉を激しく叩く雨音ばかりで返事がない。心細さと雨の冷たさに震えながら、木にしがみついていた。ふと遥か麓の方を見たとき、暗闇の中に小さな灯がぽつんと見えた。灯りがついている。人家がある。そう思うと少し元気が出てきた。あの灯りの所にたどりつくまで頑張ろう。どうか家族がいてくれますように、神様どうか私を一人ぼっちにしないでください。祈る心で灯りのある家に一生懸命に向かって、ようやく家の前までたどり着くことができた。

古い粗末な一軒家には、人があふれていた。その中に私の家族も全員いた。私は嬉しさでしばらく声が出なかった。遠くに光って私を呼び寄せてくれたその灯りは、一本の小枝であった。こんな小さな灯りがまた私たち家族を一つにしてくれた。感動しながら、揺らぐその小さな灯りを見つめていた。あの夜の出来事を思い返す度に胸が熱くなる。

北朝鮮では、九月になると朝夕が急に冷え込んでくる。夏服のまま家を出て来た私たちにとって、草原や、畠の中での野宿はつらかった。空腹のまま疲れた身体を横たえれば、晴れた夜は満天に輝く星が降るようにきらめき、満月の夜は我が家で眺めたと同じ月が美しく輝いていた。風が冷たい夜、父が子供たちに寝場所を決めてくれた。畠の中に小さく積まれた藁束の中に潜り込んで夜

空を見ている私に、「どうだ温かいだろう」と父が言った。「うん」と答えたものの、この広い畠の中で一人ぼっちは心細かった。怖いからいやだとも言えず目を閉じると、父が顔の部分だけ窓のように開けてくれた。夜中に、ふと目覚めて空を見た。ちょうど満月だったのか、まん丸の月が青白く輝いていた。「あのくらい大きな饅頭を食べたら、きっとお腹がいっぱいになるだろうなあ」と、そう思いつつ月を見ていた。

朝になってもなかなか起きない私を心配して、母が見に来たが、私はもう起きる気力が無くなっていた。温かな心地よい藁の寝床でじっとしたまま母に言った。「一人ぼっちでもいいから、このままにしておいて！」「一人では死んでしまうわ」と母が言った。「死んでもいい、死んだら正子ちゃんのいる天国へ行けるから」と私が言うと、困惑した母は、じっと私の顔を見つめて言った。「朝鮮の山奥には虎や狼がいて、一人でいると夜人を食べに来るわよ」私は頭からガリガリ食べられている自分の姿を思い浮かべて、急いで跳び起きた。

日本に帰る日まで、とにかくみんな頑張るんだ、父はいつも子供たちを力付けてくれた。今思い返せば、あのとき僅か五歳の弟は本当にどんなにつらかったことだろう。痩せて小さくなった身体で、一生懸命歩いてくれた。つらくて苦しい日々の中であったが、ときには思いがけずに嬉しい出来事もあった。

その日、夕暮れ近く山の裾野を歩いていると、近くに栗林があった。「栗が落ちているぞ」と父が言った。栗林の中に入ると、大きな実がたくさん落ちていた。私たちはまるで宝物を見付けたような思いで、夢中で拾った。ふと気が付くと一人のアボジが立っていて、私たちをじっと見ていた。咎(とが)められるのかと思い胸がどきどきしていた。でもアボジは何も言わなかった。父が頭を下げてお礼を言った。みんなで拾った大きな栗は、洗面器いっぱいあった。もう夜になっていて空に

は大きな月が輝いていた。宝物をいっぱい拾った気分で、私たちは月の夜道を元気に歩いた。

次の朝、栗をきれいに洗って川原で茹でた。母が子供たちに両手いっぱいの栗を分けてくれた。みんなニコニコして栗の実を噛みしめた。大切に握りしめて歩いた。

九月の末頃だったろうか、列車が出るらしいと聞いて、私たちは近くの駅に急いだ。駅の建物の中もホームも、南朝鮮を目指す人であふれていた。一つの車両に倍近くの人が詰め込まれた。運賃の代わりに指輪や腕時計を渡さなければ、列車を動かさないと言われて、持っていた人は出した。少し走って汽車は停車した。なぜ動かないのかと心配していると、ソ連兵が乗り込んで来たので用心するようにと、連絡の人が言って回った。父は急いで小さな握り鋏を取り出すと、母の髪を短く切って顔に煤をつけさせた。若い女性は特に用心するようにと言われ、姉たちは二人で列車の外へ逃げた。窓から外を見ると暗闇で何も見えなかった。とうとうソ連兵が私たちの車両に入って来た。大きな腕には七、八個の腕時計が並んでいた。一人一人の顔を確かめながら、母の所まで来てじっと母の顔を見た。母は男の人がするように腕組みをして眠ったふりをしていた。ソ連兵が出て行ったので私たちはほっとしたが、外へ出て隠れている姉たちのことが心配だった。父が探しに出て行った。私は、「早く、早く、列車が動かないうちに戻って来て」と、天に向かって祈っていた。しばらくすると、父が二人の姉を連れて戻って来た。二人して材木を積んだ陰に隠れていたとのことであった。あのとき、その後列車が動いたのかどうかが、どうしても思い出せない。やがて日本人がたくさん住んでいる清津という港町に着いた。日本人が住んでいた社宅が丘の上にあり、戸や襖も略奪されてなくなり荒れ果ててはいたけれど、住人が平和に暮らしていたころは、きっときちんとしてきれいな町だったことだろう。そう思うと同時に、阿吾地の我が家を思い出してい

た。

そこで幼い子供や病弱な人たちが次々と亡くなってしまった。隣にいた若いお母さんの赤ちゃんは、泣く元気もなく静かに死んでいった。夫を戦地に送り出したあとに生まれた赤ちゃんだったと、その若い母親は泣いて言った。所持金も少なく、食糧を手に入れるのが困難であったあのころに生きているのが不思議であった。ときどきは親切な朝鮮の人が、温かいご飯や茹でたトウモロコシやリンゴなどをくれた。優しさが身にしみて嬉しかった。城津という所の少し手前に、検問所があった。検問する名目は刃物の検査をするとのことであったが、子供一人一人まで全員調べられ、貴金属類、所持金に僅かな着替えまで、全部取り上げられた。何よりも悲しかったのは、亡き妹の遺骨代わりとして母が大事に持っていた、正子の髪の毛や爪さえも取られてしまったことだ。両親が悲嘆にくれている姿を見ることが、何よりも悲しくつらかった。丸裸同然の私たちは途方にくれてしまった。そのとき、父がこの近くに、父の姉である伯母一家が住んでいることを思い出し、とにかく探してみると言って町に出て行った。幸いなことに、まだこの町に伯母一家がいるらしいと分かり、私たちは少し元気を出して探し歩いた。

やっと伯母の住んでいる所にたどり着いて伯母に会えたときは、本当に嬉しかった。「苦労したんだね！　大変だったね！」と伯母は私たちの手を握りしめて泣いた。みんな久しぶりにお風呂に入れてもらい、温かいご飯を食べた。短い日数の中で、私たちに伯母が新しい服を作って着せてくれた。私は、以前我が家に泊まりに来たことのある伯母と一緒に寝て、平和で楽しかった日々を思い出した。数日そこで世話になり、銀行マンのいとこが帰って来るのを待って日本に帰るという伯母一家と別れて、城津の町をあとにした。

日本人がたくさん住んでいた興南という町に着いたときには、初雪が降っていた。私たち一家は、朝鮮人の社宅だったという十軒長屋が建ち並

んでいるところの、一軒の粗末な部屋で冬を越すことになった。とにかくここで他の人と共に春がくるまで待つ、と父が言った。部屋は温突(オンドル)式にはなっていたが、焚く薪もなく布団もない。夜になれば寒さが一段と身にしみてきたが、凍える寒さの中で家族全員身を寄せ合って休んでいた。野宿をするよりはましと思った。頑張ればきっと良くなる、両親はそう言って私たちを励ましてくれた。父も歩き回ってやっと仕事を見付けてきた。山一つ越えた農家の手伝いをして、白いご飯や朝鮮漬を分けてもらって帰って来た。そしてそれを私たちに食べさせてくれた。

興南の町には、北の方から次々と避難して来た日本人が、春になるのを待っていた。各地で組織を作り、避難して来たことを届けてお米の配給が受けられるようになり、姉たちも事務所の手伝いをしたりして、何とか生活ができるようになったが、治安はだんだんと悪くなるばかりで、夜になるとソ連兵が家の周りをうろつくようになり、特に若い娘のいる家では、心配で心配で眠れぬ不安な夜が続いた。ある日、突然に前の棟で、娘さんを連れて行こうとするソ連兵に激しく抵抗したその娘さんのお父さんが、家族の目の前でピストルで撃たれて亡くなった。娘さんはソ連兵に連れて行かれた。夫を殺されたそこのおばさんは、気が狂ってしまった。気の毒にと母は泣いていた。

数日が過ぎた夜、とうとう我が家にもソ連兵がやって来た。ドンドンと戸を叩き、そのうちにガチャガチャと錠前を壊す音がした。私は姉の手を握りしめて震えていた。父が起きていこうとするのを、母が必死で止めた。先日抵抗して殺されてしまったおじさんのことを思ってのことだった。大きな音がして、ソ連兵は土足のままで入って来ると、暗闇の中で一人ずつ頭や体に触って確かめている。私はとっさに隣に寝ていた姉の上に被さるようにして、頭を上に出した。私は十日程前に虱(シラミ)がつくからと、男の子のように坊主になっていたのだ。ソ連兵の大きな手が私の頭をつるんと

触った。やがてあきらめたのか、ぶつぶつ言いながら出て行った。息を殺したようにして黙っていたみんなから、大きな溜息が漏れた。それからすぐ押入の板を外しソ連兵がやって来ると、姉たちは急いで床下に隠れた。

春を待たずに大勢の人々が死んでいった。棺桶も無く、死んだ人は粗末な筵(むしろ)で巻かれた状態で運ばれて行った。若い男性はほとんど戦場やシベリアに送られ、父は連日死体運びを手伝っていた。固く凍っていた土は掘るのが困難で、僅かな土や雪を被せた墓は暖かくなって氷が溶け始めると、至る所に遺体の一部が見えて、つらく悲しい日々だったと、あとになって父が語ってくれた。

我が家でも、弟や姉、そして妹と私が次々と病気になった。両親の必死の看病と愛情で、春風が吹き始めたころには快復することができた。その間、前の棟の三人の子供たちが亡くなり、晴れた日に日光浴していた姿が見られなくなり寂しかった。

春の訪れと共に、いよいよ三十八度線を目指して出発する日がきた。短い期間ではあったが、忘れることができない日々であった。近くの校庭に集合して、そこから汽車に乗り三十八度線近くまで行ったが、その前後のことが私には全然記憶がなく空白になっている。川の近くにたどり着いたが、その川幅はかなり広いのに橋が一本もなかった。だが、その川を渡らなければ三十八度線には行かれないということだった。見渡せば、何人かの人が腰まで水に浸かって川を渡っている。父が流れのゆるやかな浅瀬を見付けて、そこを渡ることにしたが、川の水はかなり冷たく、子供たちは父の背におぶさって渡った。とにかくここまで頑張ってきたのだから、何としても三十八度線を無事に越えるのだ、と父が言った。昼は見張りがいて危険だから夜になるのを待つことになり、私たちは茂みの中に隠れて夜になるのを待った。去年の夏に我が家を出てからまだ一年も経っていないのに、我が家もその思い出も、本当に手の届か

ぬ、遠い遠い所の出来事のように思われた。三十八度線を無事越えることができたら本当に日本に帰れるのかは、誰も分からなかった。

声を出してはいけない、絶対に子供を泣かせるな、足音をたてるな、皆無言で息を殺しての行進だった。緊張していたから、夜通し歩いて朝になったのも気付かなかった。前列を歩いた人が、「三十八度線を突破したぞ！」と感激したような声を出して言った。軍服を着た背の高いアメリカ兵が、格好よく立っていた。少し怖かったが、笑顔だったので安心した。そのアメリカ兵に案内されて、日本人が収容されている所へつれて行かれた。多くの日本人が、引揚船を待っていた。予防注射を受け、食糧も配給され、周りの人々の顔も少し明るかった。アメリカ兵を囲んで子供たちが集まっていたので、私も行ってみた。アメリカ兵が笑いながら、肉や果物の缶詰をくれた。そして片言の日本語で、「今日本ではリンゴの唄がはやっているよ」と言って上手に歌ってくれた。子供たちは喜んで拍手をしていたが、私はなんとも言えぬ不思議な思いがした。戦時中は、何度も何度も繰り返して敵国アメリカ人は悪い人だと聞かされていたからだ。目の前でニコニコ笑っているアメリカ兵はとても優しかった。日本人でありながら朝鮮で生まれ育ち、一度も日本で暮らしたことのない私。一体どんな所なんだろう、とこれから住む日本の国を想像していた。

小学校に入学する前年に、家族全員で十日間程日本を旅したことがある。父の故郷「熊本」、母の故郷「新潟」、そして両親が新婚時代を過ごした「東京」、列車の窓から眺めた美しい富士山、どこへ行っても大歓迎され、祖母たちの優しい笑顔、いつ思い出しても忘れられない楽しい旅であった。一日も早く日本から迎えの船がくるようにと祈りながら、心弾ませて待っていた。

六月の半ば過ぎ、いよいよ引揚船に乗って日本に帰る朝がきた。みんなは心弾ませて列を組んで歩いていた。そのとき、前列にいた小母さんが突

然地面に倒れた。そしてそのまま動かなくなった。小母さんが連れていた三人の子供たちは、泣きながら「母さん！　母さん！」と呼んでいた。目の前に待っている引揚船を見ながら、そのお母さんは死んでしまった。三人の子供たちを日本にやっと連れて帰れると安心したのにと、周りの人たちは同情したけれど、どうしてあげることもできなかった。数日経ったころ、甲板で誰か叫んでいた。「日本だぞ！」「日本が見えるぞ！」と興奮して、「万歳！」と叫んでいる人もいた。喜んだのも束の間、私たちの乗った船で伝染病の人が出たということで、一週間程下船が延期された。その一週間はとても長く感じた。やっと上陸が許されて、私たちは日本の大地を踏みしめることができた。

山口県の仙崎というところに着いたのは、六月の半ばころだったと思う。ちょうど日本の梅雨期で前日に雨が降ったのか、大きな水たまりがあちこちにできていた。私たちが博多行きの汽車に乗り込んだとき、思いがけずに母の一番下の弟が、私たちを迎えに来てくれていた。私たちが帰って来る船がなぜ分かったのか、しかも大きな包みの中に立派な弁当が入っていた。走りゆく汽車の窓から外の景色を見ながら、白いおにぎりを食べたら、乾いた目から涙がこぼれ落ちた。

あのころ、日本の港には海外からたくさんの日本人が引き揚げてきて、その中から肉親を探し出すのは大変なことだったと聞いた。自分の家族が暮らすのさえやっとの時代、心をこめた手作りの弁当を持って、私たちの帰りを待っていてくれた叔父、感謝の思いは消えない。翌日、朝早く、父の故郷である熊本県の水俣という町に着いた。駅から三十分程歩くと父の生家がある。朝の明るい陽ざしを浴びながら、私たち一家は水俣橋の上に立っていた。父はなだらかに連なっている山々や、豊かに水を湛えて流れている川を無言で見ていた。父にとって何年ぶりの故郷だったろう。引揚げの途中ずっと厳しかった父の顔が、優しく

なっていた。家族をつれて帰って来たよ、とうとう帰り着くことができたよ。父の後姿はそう言っているように見えた。

夏服姿のまま我が家を出てから十ヵ月、飢えと寒さの中で生きて帰国できたことは奇跡にも近い。日本に帰る日をひたすら願いながら、北朝鮮の土となってしまった多くの友よ、日本の繁栄を夢見て、ひたすら働いて、異国の地で死んでいった多くの方々よ、私は生きて帰ることができたから、運が良かったなどととても言えない。

父の実家では、裸同然で引き揚げて来た私たちを快く温かく迎えてくれた。お風呂に入り、白いご飯とみそ汁をお腹いっぱい食べて、やっと人間に戻ったような気分であった。一ヵ月近く伯父の家で世話になっていたが、いつまでもそうしてはいられず、町から一里程離れた小さな村に引越した。そこに父の長兄である伯父一家が、十人家族で住んでいたが、以前に家族で旅行に来たときとは様子が違っていて、私たち家族は歓迎されざる一家であることを知らなければならなかった。

私たち一家が住むことになった家は、橋の上から正面に見える小さな粗末な家だった。部屋は八畳と六畳二間で、薄い板を張りつけて壁もなく、天井の張板もなく電灯もない、本当に掘っ建て小屋のようであった。栓をひねればお風呂が沸き、冬には台所にもお湯が出て、各部屋にもスチームがあり、どんな寒い冬の日でも暖かく暮らすことができた北朝鮮での暮らしを、いやでも思い出す日々であった。夏には、天井から大きな蛇がどさりと音を立てて落ちてきた。冬になって雪が降ると、板のふし穴から雪が舞い込んできた。満足に布団もない暮らしで、ああこれが期待していた日本の暮らしかと悲しかった。時にはつらくて文句を言う私に、母は噛みしめるように言った。「もうどこへ逃げることもしなくてよい。野宿をして夜露に濡れることもない。家族がみんな元気でいられるのが一番。今は日本中の人がみんな同じ苦労をしているのだから、頑張りましょう。今に

きっと良くなりますよ」と励ましてくれた。
　伯父の家も、近所もみんな田んぼがあり農家だというのに、一升のお米もなかなか分けてもらえず、母はいつも苦労していたが、一度も愚痴ったりしなかった。町まで一里の道を歩くのに、子供の足で一時間はかかったが、二学期から妹と私は三年生と五年生で町の小学校に通うことになった。父も会社で働くようになり、姉たち二人も町で働くようになって、なんとか我が家も暮らしができるようになった。でも何もないのは相変わらずで、晴れた日曜日には家族で近くの山に薪取りに行ったり、夜の川にカンテラを灯して川蜷（カワニナ）を取りに行ったりした。私も家の手伝いができるようになった。近所でも、学校でも引き揚げて来たよそ者として、白い目で見られ虐められて悲しいつらい思いもしたけれど、「あなたが悪いことをしていなければ、どんなときでも胸を張りしっかりと上を向いて、堂々と生きていきなさい。虐められる人より、虐める人の方が可哀想だ」と母がしょっちゅう言っていた。そして、「あなたが友だちを虐める子供でなくてうれしい」とも言っていた。なんとなく理解ができて、虐められても我慢するように心がけていた。
　二年程過ぎた春に、町の小さな社宅に引っ越した。小さな荷車に僅かな道具を積んで、山道を下った。雨の日も、風の日も、雪の降り積もった日も、妹と二人で歩いた道を荷車の後押しをしながら歩いた。私の人生の中で、最も貧しくそしてつらくて苦しい日々ではあったが、家族全員肩を寄せ合い心を一つにして、精いっぱい頑張って生きていた日々でもあった。もう二度と戻りたくないと思ったけれど、いつのころからか、私の胸の中であのころの一日一日が宝石のようにきらめいていた。
　町に住むようになり、学校も近くなり、姉が働いたお金でミシンを買って、私たちに洋服を縫ってくれたりして、やっと人並みに生活ができるようになったとき、母が心臓病で倒れた。以前から

悪かったらしいが、子供五人を育てるために生命を削って頑張ってくれた母。不自由な田舎での生活、慣れぬ農作業の手伝い、なんといっても引揚げ時の苦労が、母の生命を縮めたのだと思う。昭和二十四年一月五日、春から小学生になる弟のことが心残りのまま、母が亡くなった。「情けは人のためならず」「友だちを憎んだり軽蔑してはいけない」「心に恥じない生き方をしていきなさい」などと、折々に聞かされた母の言葉、一日たりとも忘れたことはない。四季が巡りくる度に、自らの思い出と共に、澄んだ声で歌ってくれた母。母と共に暮らした日々は僅か十三年であったが、豊かな思い出は尽きることがない。戦争がなければ、引揚げという苛酷な体験もすることなく、たくさんの孫に囲まれて幸福な日々となったであろう。戦争さえなければ、多くの人々が尊い生命を失うことなく平凡に生きられたであろうに、北朝鮮の遥かな山河に祖国を思いつつ、眠っている人々よ、その無念さはいかばかりであったか、決して忘れてはならない。

母亡きあと、一人で五人の子供を育て、孫九人曾孫二人に囲まれて、八十八歳で母と妹の所へ旅立って行った父。一昨年十三回忌を終えた。今は心から両親に感謝する日々である。

今から二十数年前、阿吾地会が設立されていることを知り、姉と共に参加させて頂き、三十年ぶりに一年生の時の恩師にお会いすることができたし、懐かしい級友二人とも再会を果たすことができて感無量であった。一昨年に、韓国のソウルにも阿吾地会があることを知り、姉妹三人で参加した。三十八度線のある板門店まで行き、すぐそこが北朝鮮であるという大地に立ったとき、声も立てず三十八度線を越えた日のことを思い出していた。実にあの日から五十五年ぶりのことである。

豊かに流れていた豆満江、そびえ立つポプラ並木、澄み渡る晩秋の空、シベリアから数え切れないほどの渡り鳥が飛んでいった。

私を育んでくれた、薫りたつ大自然よ、快活で

心優しい人々よ、今も元気でいられるであろうか。我が妹や親しい友人が、あの大地に眠っている。生まれ故郷に帰る日を夢見て、半世紀が過ぎてしまった。なぜ人間は戦争をするのだろう。その思いを胸に抱き、空腹を抱え痛む足を引きずりながら、果てしなく歩いた日から既に五十数年経ってなお、この地球上に戦火は止まない。

憎しみ合う心で人に銃を向けるより、温かな心で優しい笑顔で向き合うことができれば、どんなに素晴らしいことだろう。いかなる場合であっても、戦争はノー、とはっきり言える自分でありたい。命の尊さを、平和の大切さを、子や孫に声を大にして語り続けていきたい。

三十八度線を越えて

長野県　片桐信子

はじめに

平成十五（二〇〇三）年の二月八日には、私も無事に古稀を迎えることができました。五十八年前のあの苦難の道に遭遇した私が、何とか元気に七十歳の節目の年を迎えられるなどとは、考えてもみなかったことです。昔は、「人生七十、古来稀なり」と言われていて、七十歳まで生き長らえるなどということは、並大抵のことではなかったのです。ましてや私のごとく、死線を越えるような避難行を経験し、幾度か死に直面する場面を、神仏の庇護と母の並々ならぬ努力によって何とか克服して今日を迎えたことは感慨無量なるものがあり、生きることの尊さを身をもって得たことを、現在の平和にどっぷりと漬かっている人々に